

---

# されどゆかしき、恋せよ乙女

天地 袋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

されどゆかしき、恋せよ乙女

### 【Nコード】

N6394D

### 【作者名】

天地 袋

### 【あらすじ】

春。僕の街の桜は開花が少し遅れています。入学式にはきっと…。遅咲きの桜の季節、僕は貴方に出会いホント殺されるかもしれません。

一話：春風にほいし（前書き）

たまには、こつこつものもいいものです。

## 一話：春風にほいし

春。

今年は開花が遅れたせいか、入学式にもまだ桜は散らずに残っていた。

僕の街では、桜は卒業シーズンの花だという印象が強かったから、入学式に咲いている桜は少しだけ珍しいと思ったんだ。

僕が今日、入学したこの高校へは、僕の中学校から他の入学者は居ない。

だから、入学式のあと、戯れてる他の生徒を尻目に学校の中を散策することにした。

午後はクラブ紹介といって、様々なクラブが新入部員獲得のために動き出すようだ。

僕は、苦笑いを浮かべながら、何件か誘いを断り、できるだけ静かな方へと逃げるように歩いた。

気づけば、図書館の前に来たようだ。

丁度良い、ここで少し時間を潰そう。

キィ…。

古臭いドアを開けると、冷たい空気と、本独特の匂いの空間が開けた。

僕は適当に、1冊本を手にとると窓際の席に腰を下ろした。

僕は図書館に人がいると言う可能性を微塵も考えていなかったから、前の席に女の子がいることに気づいた時は驚いてしまった。

紺のカーディガンを、セーラー服の上に掛けた彼女は僕が入って来たことに気づかないのか、顔を本からずらさない。

どこか少し窓が開いているのだろうか、緩やかに波打つ年季の入った白いカーテンに、散る桜の花びらが影絵のようにヒラリヒラと舞い落ちていった。

パラパラと、ページをめくって、適当に眺めては目を閉じる。典型的な暇というヤツだ。

軽いため息をついてカーテンを少し捲ると、どうやら外は中庭のようだ。

僕はカーテンを戻すと、また視界を部屋に戻した。

相変わらず、女の子は本を食い入るように眺め、たまに顔をしかめたり、微笑んだり、コロコロ表情を変えている。

僕は、散る桜の花びらの枚数を意味もなく数えてはあくびをしていた。

カクンと、急に下に落ちる感覚で目を開けると、日はどっぷり暮れてしまっていた。

「あれ？寝ちゃったのか？」

独り言で目を擦りながら、腕時計を確認すると19時半過ぎを指している。

こんな時間だというのに、女の子もまだ残って本を読み続けている。

さらに驚くのが、遅いのだ。

時間もさることながら、この子の本を読むペースが遅いのだ。  
牛歩、亀の歩みや、この遅さは筆舌に尽くしがたい。

とにかく、素晴らしい勢いで遅いのだ。

それは、大きなお世話かもしれないが、さすがに学校に残れる時間  
帯ではないから一言、声を掛けておこう。

「あの…。」

全く、反応が無い。驚異的な集中力だ。

「あの！もしもし！！少しいいですか！？」

そこでやっと、声に気づいたのか女の子が顔を上げた。

「え？」

こういう声を鈴の音のような声というのだろうか。

元来、図書館で本を読む女性はおとなしい、超日本的な女性と相場  
は決まっているのだ。

「もう、ずいぶん遅いけど、こんな時間でも図書室にいていいんで  
すか？」

女の子は、周りを見渡すと頭をかきながら、クソーとか、畜生また  
かーとかブツブツ言ったあと、僕の顔を見て不適に微笑んだ。

「ねえ、君。新入生君？」

「え？はい、そうです。」

「ふむふむ、んじゃ、特権発動だ。図書室の鍵を職員室まで持って  
行きたまえ。」

前言撤回。

「え？？僕がですか？」

「ん？じゃあ、私に持っていけって言っのかな？」

そっという言われ方をしては、辛い。

確かに、同じ時間まで残ってるし…。声を掛けなければ良かったな  
…。

「はいはい、分かりましたよ。先輩…。」

「素直でよろしい。ほんじゃま、さいならっ！！」

言っが早いのか、彼女もとい先輩は風の如く去っていった。

くされどゆかしき、恋せよ乙女く

一話：春風にほいし（後書き）

はい、こんにちは。天地袋です。  
もう少し、もう少しまってください。  
必ず、払いますから。



## 二話：泡吹けど踊らず

緩やかに零れる朝の光も、起き抜けのぼんやりした景色の中でのコ  
ーヒーの香りも、

僕の憤慨した気分を晴らすにはいたらなかった。

春先の明け方はまだ少し肌寒いようで、靄の掛かった住宅街を行く  
人々も息で手を温めていた。

僕は駅へと向かうまばらな人たちに紛れて、行き過ぎる自転車の後  
ろを眺めては同じように手を温めた。

横に流れる川の藻に、桜の花びらが絡まって桃色の道に水が流れて  
いる。

そんな景色を見ても、僕は悶々と、いや、イライラとした気分を払  
拭出来ずにいた。

「ふう……。仕方ない、鍵くらい返してくるか。」

僕は、一通り窓の鍵を確認して図書室の電気を消した。

いやに静まった校内は、廊下の電気も消えていて夜の闇があたりを  
包みこむ。

廊下の端の方だけ、微かに光が漏れ廊下を照らしていた。

慣れない学校だから確証は無いが、多分あそこが職員室だろう。

僕は部屋に鍵を掛けると、何も考えなく職員室の扉をあけた。

「失礼します。図書室の鍵を持ってきました。」

「あんた！何回言えば分かるの！図書室は5時半までっていつも言ってるでしょう！！」

50歳くらいだろうか、眼鏡を掛けた女の人が、いきなり怒鳴り散らした。

一瞬、閉口したが僕は今日入学したのだと、思い出した。

「え？すみません。今日、入学したので…。」

「あんた！図書室の壁にも書いてあるでしょう！！しかも、鍵を勝手に持ち出しておいて、図々しいにも程があるわよ！！」

え！？鍵を持ち出すって、僕が行った時には開いてたじゃ…あつ！！！！

そうだ！あの女の先輩、僕が入った時には中に居たぞ！？

「ぼ、僕じゃないですよ！女の先輩が中に居たから、多分あの人が持って行ったと思います。」

「んまあ！あんた！！人のせいにしようだなんてっ！！だったら、その子が来るでしょう！何であんたが鍵もってんのよ！！嘘くらい上手くつきなさい！！！！」

「ちょ！僕は持って行けっっていわ…」

「あんた！ちよっと、一年生の何組の誰君！？ちよっと来なさい！！」

今、思い出しても青筋だつて来る。

なんで、僕が反省文を書かなきゃならないんだ！

電車で揺られながら、満員具合も相まってイライラを増幅させていった僕は、気づけば学校にたどり着いていた。

あの女先輩、絶対見つけて文句を言つてやる。  
新たな決意を胸に、僕は下駄箱で靴を脱いだ。

待てよ？どうやって？

苦くもヤツは先輩だ。名前もさる事ながら、2年生なのか3年生なのかも分からない。

しらみ潰しに、上級生の教室を回ろうか？

効率が悪すぎるし、何か弊害が起こるかもしれない。

「前途多難だ。」

僕は、イライラに任せて教室の扉を盛大に開いた。

「ん？よっ！」

いきなり、扉の前の席に座っている女に声を掛けられた。

ん！？こいつは昨日の先輩じゃないか！？何でこの教室に？まさか謝りに来たのか？？

色々な思考が脳裏を過ぎったが、僕の口から出た言葉はアホのような声だった。

「ふえ？なんで！？」

ぶふっ、つと女先輩は噴出すと大声で笑い出した。

「あははははは！ちょ、ゴメンゴメン！君、面白すぎですよ！私を殺す気なのかね！？」

「な、何がだよ！あ、そんなことより先輩！酷いじゃないか！鍵返すと怒られるの分かってたんだろ！？反省文書かされたじゃないか！！！」

「ええ！？ホントに！？あっはははは！！初日に反省文とか！ちょ、ゴメンゴメン！あとさゝ君、勘違いしてるから教えてしんぜるけどさっ、私このクラスの生徒なんだけど？」

何だか、僕は悲しい気分になって怒りは泡の様に消え去った。

「あ……。ごめん……。ダブリですか……。」

「はあっ！？何それ！？失礼な！正真正銘！私は1年生なのだよ！ワトソン君？」

その刹那。

僕の中で消えて行ったはずの泡が、お風呂に入れた直後の炭酸バブのような勢いでブクブク泡を吹いた。

あまりの衝撃と怒りと炭酸とその他で、言葉は止まり、ただ彼女を指差して鯉のように口をパクパクさせるのが限界だった。

そんな僕を見て、また彼女はお腹を押さえながら大きな声で笑った。

くされどゆかしき、恋せよ乙女く

## 二話：泡吹けど踊らず（後書き）

はい、こんにちは。天地袋です。

たぶん、通常の構成で行くならば、この回までがプロローグかな？  
と思ったり、色んな事を考えていたりいなかったり。  
やっと、学園モノの流れに入れるかなあ…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6394d/>

---

されどゆかしき、恋せよ乙女

2010年10月28日08時48分発行